

A c a n t h u s

第 8 2 号 平成 2 7 年 9 月 8 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



予科練時代を語る小椋秀雄氏↓
小椋氏所属班の集合写真一
(小椋氏所蔵)



三重海軍航空隊奈良分遣隊甲飛 15 期の同じ班のメンバーと
①分隊長高橋大尉 ②班長さん ③小椋さん

霞ヶ浦 (その 17) ~ 民宿「秀峰」の親父さん ~

1983(昭和 58)年から始まった裏磐梯曾原湖畔での共同宿泊学習。錨のマークのついた予科練の略帽(実はボート組合で作ったもの(だそう)をかぶり、ベンツ製のエンジンを搭載した大型モーターボートで松原湖上を疾走していた秀峰の親父さん。多くの一高生たちがそのスピードに快感と恐怖を味わせてもらいました。その秀峰の親父さんも予科練の出身者。2014(平成 26)年 11 月 2 日、高 5 回飯村弘、高 21 回松井泰寿がお話をうかがってきました。

予科練に志願

民宿「秀峰」の親父さん、本名は小椋秀雄さん。1927(昭和 2)年 11 月 1 日生まれ。松原村立松原尋常小学校高等科卒業後、上京、パイロット用ゴーグル製造会社で働いていましたが、1944(昭和 19)年、あこがれていた予科練に志願しました(どうせ徴兵になるなら、早く軍人になつていたほうがよいとの思いもありました)。兄は徴兵で陸軍に入り、北支戦線で従軍中でしたが、両親は何も言いませんでした。会社の同僚 2 名も一緒に受験しましたが、小椋さんのみ合格。三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊する際には、会社の方々が壮行会を開いて送り出してくれました。

三重海軍航空隊奈良分遣隊

三重海軍航空隊奈良分遣隊は、一挙に増加した予科練甲飛第 13・14 期の生徒を教育するために新設された予科練教育航空隊で、奈良県山辺郡丹波市町(現天理市)の天理教宿舍を接收し、1943(昭和 18)年 12 月 1 日に発足しました。街中に建ち並ぶ信者詰所 20 数箇所に分散して宿舍・練兵場が設けられ、教育・訓練が行われていました(昭和 20 年 3 月 1 日には「奈良海軍航空隊」として独立しました)。

小椋さんは、1944(昭和 19)年 10 月に三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊(甲飛 15 期)、七つボタンの制服に袖を通しました。小椋さんの所属した班の人数は 40 名くらいで、班長さんは九州出身の下士官でした。分隊長は高橋大尉で、小椋さんは分隊長さんの従卒(将校に専属して、身の回りの世話などをする兵卒。将校当番兵)を命じられていました。早朝 5 時(冬季は 6 時)の総員起こし

から 21 時の巡検(就寝状況の確認)まで、すべて 5 分前行動、移動は駆け足、何でも自分一人で素早く、スマートにできなくてはいけません。5 分前行動とは、5 分前には次の行動の心得ができていようということ。何でも 5 分前、その規律が守れないと、罰直(ばちやく)ルール違反をした者へのペナルティ、集団規律を高めるための体罰が待っていました。息抜きができるのは、「巡検終わり」という放送が流れた後のほんのひとときでした。

午前中は座学が中心で、物理、化学、国語、漢文、地理、歴史、それに気象天測や通信(モース電音)など、午後は体操や駆け足ばかりで、奈良市の若草山まで駆け足で往復させられたこともあり、班長さんが負けず嫌いで、負けると罰直が大変でした(食卓をひっくり返され、食事なしになったときもあります)。この班長さんは食事にうるさい人で、よく炊所に文句を言っていました。そのたびに炊炊所の態度がよけい厳しくなり、配給の時間を遅らされたり、御飯の盛りが少なくなりました。

土浦中学から同じく甲飛 15 期生として奈良分遣隊に入隊した糸賀一郎氏(中学 46 回)も「午前・午後、休む間もない厳しい教育に、しゃがむと足の筋肉が痛む毎日が続いた。(中略)3ヶ月間、休日に外出した記憶は無い。営内を散策し、法隆寺・明日香・橿原神宮などの古都の山なみや樹叢を眺め、心を慰めていた。」と記しています(『阿見と予科練』そして人々のものがたり)その後、糸賀氏は飛行練習生として昭和 19 年 11 月末に清水海軍航空隊へ移動、昭和 20 年 3 月

には土肥派遣隊となり、特殊潜航艇や桜花基地の建設に従事、同年 6 月には、海軍第 16 特別陸戦隊に所属、横須賀鎮守府での実戦訓練中に終戦を迎えました。

岡崎海軍航空隊へ

1945(昭和 20)年 3 月、愛知県碧海郡矢作町にあった岡崎海軍航空隊(現岡崎市・豊田市・安城市)に移動しましたが、飛行・整備訓練は行われず、練習生は本土決戦要員として陸戦訓練に従事する一方、伊勢湾・三河湾の防衛陣地構築に駆り出され、土方仕事ばかりしていました。奈良分遣隊では天理教の詰所の畳の上で寝ていましたが、岡崎は正規の海軍航空隊なので吊り床(ハンモック)です。1 分程度でセットや収納をしなければいけないのですが、初めのうちは慣れずに 5 分位かかってしまい、そのたびに罰直を受けていました。

岡崎でもとにかく忙しい生活でしたが、唯一の楽しみは外出でした。外出は 12 班に分けて交代で許可され、一般の民家が予科練生を受け入れて、もてなしてくれました。小椋さんは小呂町にあった黒田家(現岡崎 IC 近く)でお世話になりました。矢作町の岡崎航空隊から歩いて黒田家を訪れていましたが、黒田家では親身になって面倒をみてくれました(特におばあちゃん)。田植えの時期で忙しいときには、代わりに近所の家に接待を頼んでくれて、その家でも歓待してもらいました。

特攻隊に選抜されて横須賀に転出が決まり、特別外出が許可になりました。そこで黒田家に最後のお別れに行きました。黒田家から帰るときに、これまでお世話になったお札にと、団扇の下にそつと 10 円札をおいてきました。しかし、

横須賀への転出が遅れ、もう一度特別外出が許されて黒田を訪れると、おばあちゃんに叱られ、逆に餞別までいただいたしまいました。

横須賀久里浜、伏龍・嵐部隊へ

1945(昭和20)年7月、上等兵から兵長に昇進し、伏龍・ウ772嵐部隊に所属しました。伏龍とはアジア太平洋戦争末期に考案された特攻兵器の一つで、簡易潜水服で海底に潜み、敵上陸用舟艇に「棒機雷」を突きあげて爆破させようとするものです。本土決戦では、まず特攻機などが接近すれば人間魚雷回天や特攻艇震洋などの水上特攻部隊が迎撃、そして上陸用舟艇を水際で迎撃するのが伏龍という構想でした。

伏龍隊員は粗末なゴム服に潜水兜を被り、背中に8リットルの酸素ボンベを背負い、胸には呼吸の二酸化炭素を吸収する吸収缶を提げ、腹に鉛のバンド、足には鉛をしこんだワラジをはいて潜水しました。潜水兜にはガラス窓が付いていますが、足下しか見えず視界は悪く、総重量は68kgにも及びました。伏龍の作戦では遊泳は考えられておらず、隊員は海底を歩いて移動することになっていました。仰向けにひっくり返ると一人では起き上がれないので、常に前かがみで恐る恐る歩いていました。また船上から金属を叩いてモールス信号で辛うじて伝達するぐらいで、陸上や隣の隊員との連絡手段はありませんでした。

吸収缶は伏龍の最大の欠陥部分でした。これは長時間の潜水を可能にするために考案された半循環式の酸素供給機です。呼吸に含まれる二酸化炭素を、苛性ソーダを利用した吸収缶で除去、再び

吸入し、20分に1回くらい酸素ボンベのバルブを開けて酸素不足を補うという仕組みになっていました。訓練では鼻で吸気して口から排気するよう教育されましたが、実際には3、4回呼吸すると炭酸ガス中毒で失神しやすく、10〜15分位の潜水でも半日から1日潜水しているような気分になり、夢を見ているようでした。上官の少尉さんが見本を示すと、潜って潜水しましたが、ガス中毒になり、失神してしまいました。顔を叩けばよいのですが、上官ですのでそうもいかず困ったこともありました。

吸収缶が破れたり蛇管が外れたりして呼吸回路に海水が入ると、吸収缶の水酸化ナトリウムが海水に溶解し、大きな溶解熱のために高温となった強アルカリ性の海水が潜水兜内に噴出し肺を焼くという、きわめて重大な欠陥があり、訓練中に横須賀だけで10名の殉職者を出しています。海中では視界も悪く、動きもさらに鈍くなるため、上陸用舟艇に向かって移動するのは事実上不可能でした。「棒機雷」は長い柄を持っていましたが、水の抵抗で自由に振り回すことができず、当初5mも長さがあったものが2mに切り詰められました。隊員の直上を上陸用舟艇が通りかからない限り攻撃のチャンスはありませんでした。しかも、部隊の展開密度を上げると棒機雷が炸裂した時の爆圧で、近くの隊員まで巻き添えになるどころか次々と誘爆してしまう問題点がありました。そもそも、海中での爆発による強烈な水圧は隊員に致命的なダメージをもたらすため、上陸に先立つ砲撃が付近の海中に落ちただけで、伏龍部隊は全滅状態になっていたと思われれます。

横須賀に移ってから、小椋さんたちは毎日潜水訓練に明け暮れました。岡崎の土方作業より楽でしたし、何より毎日銀シャリや豪華な料理を食べられたのでうれしい思いをしていました。しかし、横須賀が空襲を受けた時には海軍橋のたもとに繋留してあった特攻用舟艇で一晩待機させられ、不安でまんじりとも出来ませんでした。東の空から朝日が昇ってきた時には、自然と手を合わせていました。



作ケ模 スケ模
がス模 スケ模
海軍の模 スケ模
伏龍(右)と「Wikipedia」
アメリカ人(下)アメリ
ア成ツチ(下)アメリ



ほどの雪です。伊豆半島へ山仕事の出稼ぎに行きました。冬の出稼ぎは、夏の炭焼きとともに貴重な現金収入となり、これで子どもたちを学校に行かすことができました。昭和40年代に入り、ようやく余裕もできたので、岡崎でお世話になった黒田さんを磐梯に招待すると、おばあちゃんと娘さんが来てくれました。会津若松や西吾妻スカイラインなどを案内し、曾原湖畔の宿「ゆたか荘」に泊まってもらい、喜んでいただきましたので、多少のお礼はできたのではと思っています。

終戦・復員・民宿開業
1945(昭和20)年8月15日に終戦となり、8月20日にはハンモック一つを持って、実家に復員しました。農業や山仕事、炭焼きなど、実家の仕事を手伝っていました。1949(昭和24)年、22才で結婚、奥様は19才でした。翌年、曾原湖畔の現在地に入植、周囲は背の高い藪だらけで磐梯山も見えませんが、まず畑を開き、小豆、ジャガイモから栽培していきまし。さらに水田をつくり、稲作を始めました。寒さで種籾さえ取れない年もありました。冬は玄関先からスキーで出ていく

しかし1973(昭和48)年、自宅が火事で全焼し、途方に暮れていましたが、黒田さんからチツキ(かつて国鉄が行っていた小口の荷物輸送業務)で火事見舞いの品(米・味噌・醤油、その他生活必需品)が届き、有り難さに涙がでました。こうした人たちの励ましで何とか頑張ることができ、1975(昭和50)年には民宿「秀峰」を開業しました。その後、仲間たちと曾原民宿組合を結成し、組合長としてPRに東奔西走、共同宿泊学習の生徒さんたちを迎えることになりました。土浦一高さんには、1983(昭和58)年から来ていただきました。息子が肝試しで熊の剥製を着て脅かしたところ、女子生徒さんが失神してしまい、ご心配をおかけしましたが、皆さん素直で明るい生徒さんばかりで、こちらが嬉しくなりました。さらに一高さんが共同宿泊をしているという理由で、茨城県の県南地区の高校生や中学生が夏の共同宿泊学習や冬のスキー教室で曾原の民宿組合を利用してくれました。これも一高さんのお陰だと今でも感謝しています。